135

六堂会古墳

（加世田市大字小湊字奥山）

位置と環境

長屋山から北側にのびた舌状台地の縁辺部にあたる標高約20mに位置し，遺跡周辺に広がる湿地帯との比高差は約５mである。北西側約１㎞先には東シナ海と吹上浜を臨む。

調査の経緯

本遺跡は，昭和６年（1931年）に地主の安藤美静によって発見された。安藤は副葬品を掘り出して宅地内に奉祀したが，奇異な事項が頻発するため，昭和10年（1935年）に副葬品を原位置に埋め戻し，当地に石祠を設置した。その後，昭和16年（1941年）に藤森栄一・土持鋤夫・住谷正節によって発掘調査が行われた。

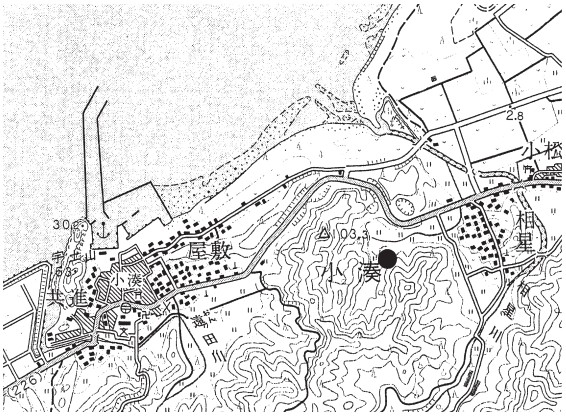
遺構と遺物

発掘調査は，安藤が掘り出した副葬品を埋め戻したとされる主体部のみを対象として行われた。表土下約30㎝で発見された主体部の形態は，組合せ式の箱式石棺で平面形は長方形を呈し全長約2.1m・幅約0.6mを計り，長軸が東西を向く（尾根すじに対して直交）。なお，人骨（頭部）の出土位置から頭を西向きに埋葬していた。側壁はいずれも偏平な粘板岩で構成され，その外側には礫を用いて補強している。石室内の床面には底石は無く，粘土が敷き詰められ，その上に朱泥が堆積していた。また，蓋石は直径１mを超す偏平な粘板岩２枚によって覆われ，その石材同士のわずかな隙間には小さな偏平な粘板岩２枚を充填していた。墳丘については，現在では確認できないが，発掘調査時には「ささやかな墳土」があったようである。

遺物は，土器（小型丸底壺？），鉄製の剣・刀子・鏃，ガラス製小玉，人骨（頭部）が出土した。時期については遺物の検討から５世紀前半以前と考えられる。

特徴

本遺跡は，昭和６年（1931年）に発見され昭和16年（1941年）に発掘調査が行われており，県内において数少ない戦前の発掘調査例である。



第１図　六堂会古墳の位置

六堂会古墳は，発掘調査時には低い墳丘があったとされれる点から高塚古墳（畿内型古墳）の可能性が高い。しかし，これまでは主体部のみの調査のため，周溝の有無等といった古墳全体の構造について不明な点が多く，今後の調査に期待したい。

南九州における古墳時代の墓制は畿内から波及した高塚古墳のほかに隼人の墓制とされる地下式板石積石室墓，地下式横穴墓，立石土壙墓等がみられる。しかし，薩摩半島に限ると枕崎市や揖宿郡山川町といった南部一帯に立石土壙墓が分布し，高塚古墳の可能性が高い遺跡としては本遺跡と近年発見された指宿市弥次ケ湯古墳のみである。本遺跡は，薩摩半島における大和朝廷の勢力の波及を示す可能性を示しており在地の隼人との関係を探る上において重要な遺跡と考えられる。

資料の所在

六堂会古墳は昭和48年（1973年）12月20日に加世田市の史跡に指定された。

現在では発掘調査された主体部の箱式石棺墓が蓋石を取り除いた状態で現地に保存されている。また，出土した副葬品は，加世田市教育委員会に保管されている。

参考文献

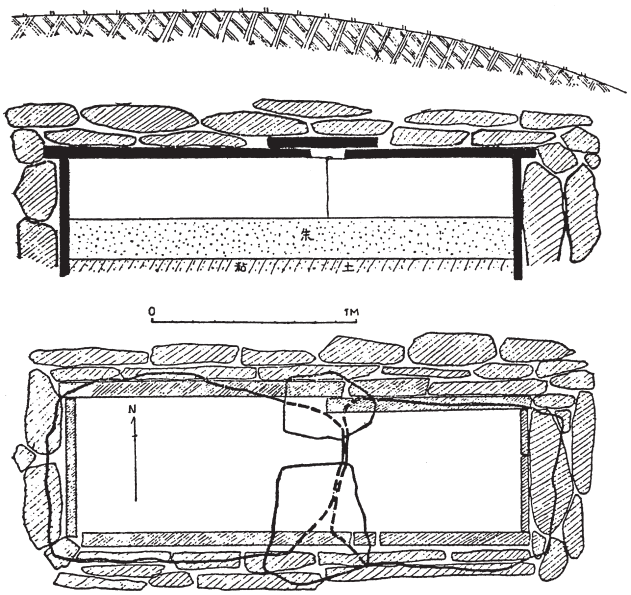
土持鋤夫・住谷正節1942「薩摩万世町六堂会古墳」『古代文化』13-3日本古代文化学会

山崎五十麿1943『鹿児島県の古墳と当時の文化』鹿児島県国聖跡調査会

（上東克彦）

写真１　遺跡近景

写真２　六堂会古墳（箱式石棺墓）



第２図　六堂会古墳　実測図（土持・住谷1942より）